

阪大分会ニュース

No. 57 2010年1月15日発行

関西単一労働組合大阪大学分会
大阪市淀川区十三東 3-16-12 TEL06-6303-0449

正規・非常勤・派遣・委託など
1人でも入れる組合です
あらゆる相談を受けつけます

短期非常勤の本年3月31日雇い止め＝解雇を 阻止しよう！

長期非常勤の「当分の間」撤廃を許さないぞ！

阪大は非常勤全員を継続雇用せよ！



非常勤職員の皆さん。私たちには厳しい年明けとなりました。阪大は04年法人化時に採用した短期非常勤職員を6年期限を理由に3月末に雇い止め＝解雇しようとしています。また、法人化以前から勤務する長期非常勤職員には、「当分の間」だけ雇用期限の適用除外としてきた「申し合わせ事項」を撤廃し5年後に解雇しようとしています。しかし、私たちはこの阪大の非常勤職員差別・使い捨て攻撃を絶対に認めることはできません。非常勤職員の団結でもって、特例職員制度の導入ではなく、非常勤職員全員の継続雇用を勝ちとるために共に闘おうではありませんか。

「6年雇用期限」解雇は違法だ！ 阪大の非常勤差別・使い捨てを許さない！

阪大は「6年雇用期限」で雇い止め＝解雇をおこなう短期非常勤職員数を30人と団交にて公表しました。この30人は雇用更新をすでに5回繰り返しています。また、業務は臨時的・季節的なものではなく恒常的なもので、仕事はなくなったではありません。特例職員制度導入の説明においても、阪大自ら「法人化になって新たな業務の増加、外部資金の獲得によるプロジェクト等の増加、及び教育研究支援体制強化の必要性の増大など」によって大量の仕事があり、労働力を必要としていることを明言しています。5回も雇用更新され、仕事もある場合、雇い止めといっても、一定の法的保護があり、更新拒否＝解雇はできないことになっているのです。これは、長期非常勤職員の場合も同じです。阪大には非常勤職員を雇い止め＝解雇する正当な理由はどこにもありません。



一人で悩まず、阪大分会に連絡を！

阪大の非常勤職員のみなさん、私たちは一人一人孤立しているように見えますが、学内外に目を向けてみましょう。共に連帯し手を結ぼうとする仲間たちがいます。私たちは大変勇気づけられています。一人で悩まず、あきらめる前に、ぜひ、分会に連絡してください。

共に連帯して声をあげましょう。

非正規労働者の談話室

日時 1月22日（金）午後6時～9時
場所 豊中市立千里公民館 第1会議室
(豊中市千里文化センターコラボ内)

・アクセス

北大阪急行又はモノレール千里中央駅下車

・都合のいい時間にお立ち寄りください。

短期(有期)雇用制度の撤廃を! 今こそ、短期・長期ともに団結しよう!

阪大のやり方は極めて不当で悪質です。1年雇用を反復更新して、2年、3年、4年、5年と働き続けているのに、「就業規則では最長6年だから」と労働者の首を切ることが認められますか。まして、法人化以前から数十年に渡って働いているのに、「5年後の雇い止め」を認められますか。そもそも「1年雇用で最長6年」という短期(有期)雇用を定めた就業規則が問題なのです。

阪大が雇用期限を設けているのは、首を切るためだけです。すでに11月24日に「当分の間」撤廃を決定していますが、「当分の間」の継続を要求する私たちとの団交は続けています。私たちが阪大の不誠実団交を抗議しても、阪大は「現時点で最善策である」「団交はしているんだから」と開き直るばかりです。

労働者にとって有期雇用ほど不安定な働き方はありません。ワーキングプアを生み出す有期雇用をなくすことがもっとも必要であり、多くの非正規労働者

者がその闘いに立ち上がっています。京大や私立大学の非常勤職員の仲間たちも雇い止め=解雇を阻止するために闘っています。そして、大学の枠をこえて共に声をあげようと「なんで有期雇用なん!?大学非正規労働者の雇い止めを許さない関西緊急集会」をもちます。また、阪大内でも、教職員有志によって、教員や職員や学生などの枠を超えて「大学の非正規労働者について考える全学大討論会(仮称)」も計画されています。非常勤職員のみなさん、参加して、私たちの積年の思いを訴えようではありませんか。

なんで有期雇用なん!?大学非正規労働者の雇い止めを許さない関西緊急集会

- ・基調報告/脇田滋さん(龍谷大学/労働法)
- ・現場報告(組合から)・特別報告(職員から)
- ・2月27日(土)1時~4時 エル大阪7階708号室
- ・主催「大学非正規労働者の雇い止めを許さない関西緊急集会」実行委員会

韓国・非正規労働者の“熱い闘い”の生の声を聞いてきました!

昨年末の12月14日大阪で開かれた“「イーランド争議」の女性労働者を囲む集い” に行ってきました。2007年、韓国のスーパー「ホームエバー」の親会社イーランドがレジ係などの非正規労働者を大量解雇したことに對して、500人の女性労働者はスーパーを占拠し泊り込み(外泊)を始めました。その実際の闘いをジェンダーの視点から撮ったドキュメンタリー映画「外泊: weabak」の主人公でもある二人の女性が来日し、512日にもおよぶ非正規労働者の解雇撤回の闘争を生の声で語ってくださいました。韓国は日本以上に非正規職の比率が高いそうです。でも、映像の中で、非正規労働者を使い捨てる社会の矛盾に對して、真正面から立ち向かう彼女たちのパワーには驚くばかりです。私たちと同じように理不尽な雇用期限を付けられ雇い止めされる不安に脅かされながらも、彼女たちはなんと自然に生き生きと闘っていることでしょう! 今回来日されたお二人とも決して特別な活動家ではなく、普通の、スーパーの店員であり、家庭の主婦なのです。

お二人の語るハングルは、残念ながら私には理解できない言葉でしたが、その表情から言葉の響きから伝ってくるものは、とても自然なものでした。それは、自分たちを取り巻く“矛盾やもやもや”に對して、「ちょっと、それ、おかしいやないの!」と声に出していくことは、決して肩肘を張ったものではないのだと教えてくれるようでした。

2004年の法人化後、大阪大学で一方向的に導入された非正規職の6年期限や法人化前からの非常勤を對象にした5年後の雇い止め。こんな、とんでもなく“おかしいこと”に對して、私たちはありのままに、「それって、おかしいやないの!」「私たちは道具と違う、生活している人間なんや!」と言っていいんだと、あらためて強く実感させられた集いでした。(吉田由美)

